

旅行記

中国の首都北京から三百キロメートルの西にフフホト（呼和浩特）の街はある。ここはすでに万里の長城を越えた、モンゴル高原の一角。海拔約千メートルの内陸アジアの気候の街フフホトは内モンゴル自治区の中心地である。

昨年の四月から、大学の海外派遣研究員としてフフホトの街で一年間暮らした。澄み渡った青い空、乾燥した空気、体に突き刺さるような冬の冷氣、殺風景で広大な大地と大陸的な時間の流れ……折に触れ、ふと「今頃、フフホトは……」と思いを馳せることがある。

「内モンゴル」に「モンゴル語の研究」に行くと言えば、草原のテントに住み、毎日羊の肉を食べ、馬に乗って暮らしていたと受け取られても無理はない。しかし、私にとってもいささか残念なのであるが、住んでいたのはビルの建ち並ぶ都会であり、泊まっていたのはバス・トイレ・電話・テレビ付きの洋式ホテル、食事はそのホテルの食堂で三食できあいの中華定食をいただいていたというのが、実際である。

● 二つのモンゴル

「モンゴル」には、ロシアと中国に挟まれて、モンゴル高原の中心に位置する「モンゴル国」と、それと南に国境を接して中国領内にある「内モンゴル（内モンゴル自治区）」がある。そ

モンゴルの青き空の下で

栗林 均



こに暮らすモンゴル族は、わが国でも「チンギス・カン未裔」としてよく知られているが、過去の歴史的、政治的な理由によってこのように二つの国家に分断されていることを知る人は少ない。

「モンゴル国」は、一九一一年に清朝から独立を宣言した後、ロシア革命（一九一七年）の影響を受けて一九二一年に社会主義革命を成し遂げ、その後七〇年間にわたって「人民共和

国」としてソビエト連邦と命運をともにしてきた。一九九〇年代に入って、ソビエト連邦の崩壊や東欧諸国の民主化と呼応してモンゴルでも民主化改革が行われた。

一方の「内モンゴル」地方は、日中戦争とそれに続く太平洋戦争の舞台となり、終戦後「自治区」として成立、今世紀の中国の歴史をそのまま体現している。

このように、歴史的・政治的に二つのモンゴルが存在しているのであるが、文化的・言語的にもその影響を被らないはずがない。「モンゴル国」と「内モンゴル」のモンゴル語は、口語では互いに理解が可能であり「方言」の関係にあると言いうことができるが、書き言葉はまったく違ったものになっている。

「モンゴル国」は過去七〇年間ソ連文化圏の中にあり、一九四七年には伝統的な「モンゴル文字」を廃止して「ロシア字」を採用した。日本語を書くのに、かな漢字をやめてローマ字を使うようなものである。書き言葉はロシア文字でつづり、西洋の文物はロシア語を介して取り入れられた。近年、モンゴル国では「伝統文化の復活」が叫ばれ、書き言葉を伝統的なモンゴル文字に戻そうという動きがあるが、ロシア字を採用してからすでに半世紀が経過し、これによって教育を受けた世代が三世代に及ぼうとし

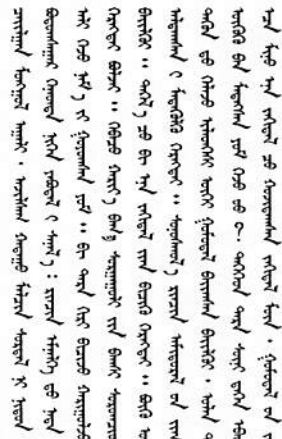
くりばやし ひとし

文学部国文学科助教授。1951年、新潟県生まれ。専門は言語学・音声学。モンゴルとの関わりは1970年に大志を抱いて東京外国語大学のモンゴル語学科に入学した時に始まる。その後幾度も挫折を繰り返し、10年前に文学部国文学科に身を寄せるも、モンゴル語への想い断ち難く、二足・三足の草鞋を履いた百足生活を送る。昨年度一年間内モンゴルに暮らしてモンゴル熱が再燃。病まさに膏肓（こうこう）に入らんと欲す。



АРДЫН ТОГЛООМ

Тоглоом бол хүмүүсийн үйл ажиллагааны загвар, ард түмний оюун ухааны бүтээл юм. Ардын тоглоомыг тоглох арга хэлбэр, хэрэгсэлээр нь шашгай тоглоом, хөлөвт тоглоом, орьсон тоглоом, гоцноо гаргах, усрах, зэвхэх тоглоом, үзэн тоглоом, зурагт тоглоом гэх мэт араа гаруй төрөлд ангилдаг. Түүний дотор эртний хүмүүсийн амьдрал, үйл ажиллагааны шууд тусгал болон зохиогдсон тоглоом ч цөөнгүй бай. «Чулуугаар байг олох», «Түү салх» г.м. Ага чулууг гаргаар нилэж тоглоом байснаа хожим төвөгс зугтах хүчгүй ашиглан хол шидэх дүүгүүрт тоглоом, «Бөмбөг намнаа» мэтийн нум сум харах тоглоом дэлгэрэн нь ан гароо хийх, биеэ хамгаалахад сурах шаардлага, хэрэгцээгээс урган гарчээ. Манай малчид хонь, ямаа, зэрэгийн шашгайгаар тогтоосор иржээ. Хамгийн их дэлгэрэн нь шашгай нэг бүрийн дөрвөн талдыг морь, тэмээ, хонь, ямаа гэж тогтоон нэрлэдэг хэсэг шашгай дэвжээнд таруухан цацаж тоглодог «шагай нислэх» гэдэг тоглоом юм. Бас «Агаг мэлхий өрөх» гэдэг тоглоом бий. Шагайгаар морь уралдуулах тоглоомыг морь урдалхаас сэлэлэн загварчлаж зохиожээ. Энэ тоглоомоо цаашдаа морь уралдах замгай нь нилэж, салж байх, зам нилэх үед түрүүчийн морьно гүйцэж идвэл иддэгсэн морийг хөлөг дээрээс авч тавих болгосин дунд илүү сонирхолтой «Бартаат замны



伝統的なモンゴル文字（縦書きで左から右へ進む）

モンゴル国で用いられているロシア字で綴るモンゴル語

ている今日、「モンゴル文字の復活」は決して容易な事業ではない。

他方の「内モンゴル」のモンゴル語は、漢（中国）文化の影響を強く被り、語彙に漢語（中国語）からの借用語が多いが、伝統的な「モンゴル文字」を書き言葉として保持している。「モンゴル文字」は、一三世紀のチンギスカンの時代にウイグル文字を借りてモンゴル語を書き表すようになったもので、以来七百年以上にわたってモンゴル族の書き言葉として用いられてきたが、現在これを使用しているのは中

国内のモンゴル族だけである。

私が内モンゴルに滞在した目的の一つは、この伝統的なモンゴル文字で綴られる書き言葉と内モンゴルの方言を学習・研究することであった。

● 大学と研究所

内モンゴルでは、内蒙古大学の蒙古語文研究所というところに所属した。

内蒙古大学は一九五七年の創立による、自治区内最大の総合大学であり、一七の学部と四一の学科をもつ。学生数は約六千五百人、専任教員は七百人余りである。学部と並んで各種の研究所や研究センターをもち、地域の特性を生かした畜産学とモンゴル学の分野で名を馳せている。

蒙古語文研究所は一九六二年に設立されたモンゴル語研究の専門機関で、名前にある「語文」は「言語と文字」の意味である。スタッフは総員二四名。モンゴル語学の分野では中国内は言うに及ばず、世界で最も規模の大きい研究機関となっている。一九八〇年代には、この研究所から毎年一人ずつ若手研究者が日本に留学していた時期があった。当時の留学生たちが今では研究所や大学の指導的な地位について活躍している。そんなわけで日本語の達者な研究者



内蒙古大学のモンゴル研究センター（絵葉書より）

が少なくない。

大学の構内にある「桃李湖賓館」という外賓用のホテルの一室が私の住居であった。名前の「桃李湖」は大学構内にある湖の名を取ったもので、モンゴル語の「トリ（鏡）」という発音

に漢字を当てたもの。大学の第一期卒業生たちが卒業記念に掘ったものだという。ホテルは五階建てで各階にツインの部屋が十室余りに、会議室やダンスホールも備わっている。部屋は八畳くらいの広さで、別室に洗面台とバス・トイレ



桃李湖賓館

レ。壁にはめ込みのクロゼットが一つ、調度はベッドのほかに書き物机、テレビ、電話、丸いテーブルと二脚の椅子が備え付けてある。お湯が出るのは朝七時から夜一二時まで。電話は、市内通話は無料だが、国際電話は直通でかけられない。サービスの等級は一つ星と二つ星の間くらいであろうか、築後四・五年を経て、床の絨毯は黒ずみ、水道やシャワーの栓は時折水漏れし、時にスイッチの接触不良でヒューズが飛ぶというように、そろそろ造作にガタつきが目立ち始めていた。この八畳一間が私の居間兼寝室兼書斎兼教室となった。

ホテルの部屋には台所がなく、食事は「桃李湖賓館」一階の食堂で一日三食の「お任せ定食」を取った。値段は一日三五元（日本円で約六百元）。朝はモンゴル風ミルクティー（砂糖の代わりに塩が入っている）一ポット、肉まん一個、粥一碗、漬け物少々、ゆで卵一個、固いパン一個というのが定番である。昼と夜は、ご飯一膳、小碗のスープ、蒸しパン一個と料理が一品（一皿）。料理は、基本的に「肉および／あるいは野菜の油炒め」で、肉は牛か羊か豚、野菜は馬鈴薯、人参、玉葱、胡瓜、ピーマン、蕪、ニンニクの茎、キャベツ、白菜、カブ、マッシュルーム、きくらげ等々、これらが適当に組み合わせられてその日の主菜となる。肉だけ

の時もあれば、野菜だけの時もあるが、油炒めであることは変わらない。スープは卵スープ、搾菜スープ、コーンスープが主で種類は五指に満たない。十日もするとメニユウの大半は食い尽くしたことになる、あとは循環にまかせるのみ。味は……そこそこと表現するのが適当だろう。

● 内モンゴルのモンゴル人

内蒙古自治区は、モンゴル（蒙古）という民族名を冠する中国の自治区であるが、モンゴル族は全体の人口の約一六%を占める。「少数民族」に過ぎない。フフホト市は、市街区の人口約五〇万人。このうちモンゴル族は一三万人強、四人に一人の割合である。残りの人口の大半は漢族である。

内蒙古自治区では、公共の看板や標識に漢字（中国語）とモンゴル文字（モンゴル語）が併記されている。景観に「内モンゴルらしさ」が感じられる点である。しかしながら、内蒙古自治区の実質的な公用語は漢語であって、公的な場面でモンゴル語が使われる機会は稀である。空港、駅、ホテル、食堂、様々な店舗、露店、商店、バス、タクシー、列車、航空機、銀行、官庁、病院、さらにテレビ、ラジオ、映画、新聞、雑誌、等々どこへいっても何を見ても使わ

れているのはほとんどの場合漢語（中国語）であり、漢字である。

言うまでもなく、フフホトの人口の約四分の一はモンゴル人であり、モンゴル人同士の会話や家庭ではモンゴル語が使われることが多いが、そうしたモンゴル人の大半は漢語との二言語併用の生活を送っていて、モンゴル語はあまり社会生活の表面に出てくる機会がない。都市部では、モンゴル語ができないモンゴル人も少なくない。

テレビやラジオでもモンゴル語の放送は時間が限られており、漢語の放送に比べて内容も見劣りがする。テレビのモンゴル語放送はチャンネルが一つで夕方五時半から一二時位まで。毎日三十分ほどの自治区内のニュースが二回と四十十分ほどのオリジナルの番組（文化、経済、スポーツ等のトピックス）がある他は、漢語のドラマやドキュメンタリーのモンゴル語吹き替え番組がほとんどである。一九九八年には、モンゴル語による「全国ニュース」の番組はなかったが、一九九九年の二月から、ようやく北京の「中央テレビ局」の全国向けニュースをモンゴル語で朗読する番組が放送されるようになった。

郵便局や街のスタンドで新聞や雑誌を売っているが、モンゴル語のものは見当たらない。市

中に一般の書店は数多いが、置いてある書籍は漢語のもので、モンゴル語の書籍や雑誌は、数少ないモンゴル語図書の専門店に行かないと入手できないのである。

市中の店舗で、店員に対して遠慮なくモンゴル語で話しかけることができるのは、このようなモンゴル書籍の専門店、モンゴル料理店、モンゴル乳製品の販売店といったところであろうか。

内モンゴルの、特に中央都市においてモンゴル語が使用される範囲と場は、このように限られたものとなっている。

● フフホトの四季

フフホトは、雨が少ない。一年のうち三五〇日以上は晴れていたような気がする。後半の半年に冬の快晴が続いたために、印象が増幅されたのかもしれないが、実際昨年の一〇月から三月に帰国するまでの間、雨の日は一日か二日、雪や雹が降ったのが二・三回、いずれも午前中に地面を濡らした程度で、午後には晴れていた。

一年を通して、ひと月に雨の日は一日か二日くらいだろうか。その雨も、二日以上降り続くということは、まずない。

比較的雨が多いのは夏である。昨年の七月中

旬、草原に車で泊まり掛けて出かけて帰ってくる日に豪雨に見舞われたことがあった。朝から降り続いた雨で、行くときにはひからびていた水なし川に濁流が渦巻いている。集まった水が幅数メートルのわかかの川となり、道路を寸断している。道の行く手を阻む流れの手前で車は何度も立ち往生し、意を決して浅瀬を渡る。ようやく市街地に入ると、車道は二〇〜三〇センチの深さの濁水に浸かり、自動車や自転車が水を切って泳ぐように進んでいる。大学の近くの車道では、排水のマンホールから逆流した水が噴き出していた。車に同乗していたモンゴル人も、こんな様子を見たことがないと驚いていたが、雨が止んだ翌日には車道の水もすっかり引いていた。フフホトではこれがこの年最大の豪雨となったが、中国各地では洪水被害が続出した年であった。

ふだんは降雨量が少ないために、街やその周辺には水の流れている川がみあたらない。空気は一年中乾燥していて、夜中に洗濯をした衣類を窓の外に干しておけば翌朝にはすっかり乾いているのが有り難い。

乾燥した空気と砂塵質の土壌で、強い風が吹くとたちまち砂嵐になる。砂嵐は、フフホトの春の風物詩のひとつである。三月・四月には、しばしば午後三時位からしだいに空が翳って、

風が強くなり、砂埃が舞い上がる。大抵の家の窓は冬の寒さをしのぐために二重窓となっているが埃は部屋の中にも容赦なく入ってきて、窓辺やテーブルの上にもうっすらと積もる。こんな時に外に出ると、目に埃が飛び込み、髪も皮膚もざらざらになる。自転車に乗っている人はマスクをつけたり、女性は半透明の薄いスカーフをすっぼりと頭にかぶって首で結んだりしている。そんな夕方の風もたいいてい夜半には止んで、翌朝はたいいてい大気も澄み渡った爽やかな晴天となる。

フフホトに到着して半月も経たない四月五日の午後、外では風の音がゴウゴウと響き、窓はガタガタと鳴り止まず、舞い上がった砂に太陽が隠れて空がオレンジ色に染まっていた。部屋の中に坐っていても、鼻や喉に埃が入って来るような気がして、息が詰まる。窓の外に荒れ狂う砂嵐を眺めながら、「この黄砂が日本に届くのかも知れない」と、感慨深いものがあつた。こんな風が日常的に吹くのかと肝を冷やしたものの、一年に一度あるかないかの風だったそうだ。

フフホトの冬は寒い。今年は例年にない暖冬だったそうで、一月・二月の気温は平均マイナスイ〇度くらいだった。フフホトでは一〇月一五日から翌年の四月一五日まで建物にスチーム

の集中暖房が入る。一〇月は、ちょうど日本の一月の小春日和のような、さわやかで穏やかに晴れた日が続いた。一月の初旬くらいまでは、日中に窓を開けていても平気だったが、部屋の中が暖かいために夕方になると蠅が入って来て、白い天井や壁に点々とへばりついていく。夜中に顔や手に止まって眠りを妨げられるのが煩わしいので、夕食後によく蠅たたきをやった。夏に使っていた団扇を手にもって椅子や机に登り、天井や壁の高いところに止まっている蠅を一匹ずつたたき落とすのである。毎日十四以上の収穫があつた。



冬の桃李湖
(正面は大学の体育館)

一月の中旬に、ホテルの名前にもなっていない「桃李湖」が氷結した。冬の間で、一日の最低気温がマイナス一九度と報じられたのがその冬一番の寒さだったように思う。北のハイラルやハルビンでは連日マイナス三〇度前後と報じられていた。

冬のフフホトに股引と帽子、手袋は必需品である。これらを身に付けていても、厳寒期には外に出て数分もすると冷気が肌にしみこんでくる。外気に触れる顔の肌はこわばり、耳や手足の指の先が鈍く痛む。ところがこんな寒さの中でも、道路脇に行商のおばさんたちが立っているのには仰天した。道ばたに自転車止め、荷台にリンゴやナシ、バナナを積んで売っているのだが、吹きさらしの中にずっと立ち尽くしているのである。

集中暖房のおかげで、冬でも部屋の中は暖かい。おまけに窓の外は快晴で、穏やかな陽ざし
が降り注いでいる。窓から外を眺めている限り、秋の小春日和そのものといった景色である。これが毎日毎日、二ヶ月も三ヶ月も続く。私の部屋はホテルの五階で南側に面していたので、一日中明るい日差しが部屋の奥まで差し込んでいた。日溜まりの猫よろしく、ひなたぼっこしながらフフホトの冬を越したことであった。



馬上にて（己が行く末に思いをはせる筆者）